

**Punch, or the London charivari** vol. 1—203, July 1841—Dec. 1942. London, 1841—1942. 203v. in 128, weekly 28.3×22.5cm <053.5-P>

『パンチ』誌は、ロンドンで発行されている漫画を中心とした世界最古の伝統を持つ風刺雑誌で、1841年7月17日に創刊された。The London charivari, という副題からもわかるように、イギリスの木版画家で図案家のランデルズ (Ebenezer Landells) が、パリの絵入り新聞『シャリヴァリ』 (Le Charivari, 1832年創刊) にヒントを得て発刊したもの。当初は、レモン (Mark Lemon), メーヒュー (Horace Mayhew), アベケット (Gilbert A'Beckett), コイン (Stirling Coyne), ジェロルド (Douglas Jerrold) らが執筆に携わり、その後、サッカレー (William M. Thackeray), フッド (Thomas Hood), リーチ (John Leech), テニエル (John Tenniel) らが加わった。特にリーチ (1817—1864) は、1841年から1864年までの長期にわたってパンチ誌絵画部主幹を務め、彼の生涯の仕事として多くの作品を掲載し、本誌に貢献した(73)。以後も知名人が数多く寄稿し、イギリスを代表する漫画評論誌として発展し、今に至っている。こうして本誌からは多くの漫画家や作家、エッセイストが輩出した。第2号までは隔週刊であったが、以後週刊となり、豊かな機知と痛烈な政治・社会風刺で、当時の中産知識階層に大きな支持を得た。創刊以来140年近く続いているが、現在も創刊当時と同じスタイルと編集方針を維持している。

ビクトリア女王治下 (1837—1901) のイギリスは自由主義の最盛期であり、パンチ誌の創刊は、イギリス的ユーモアの黄金時代の所産であった。18世紀イギリスの大画家 Hogarth (William Hogarth 1697—1764) は、当時の貴族社会や僧侶たちを風刺し、庶民生活をテーマにしたリアルな作品を描き、風刺画の基礎を築いた。そして当時もアイザック・クルークシャンク (Isaac Cruikshank 1756—1811?) とジョージ・クルークシャンク (George 1792—1878) という親子の漫画家が活躍していた。挿絵画家、水彩画家である彼らは、風刺漫画を描き、フランスの風刺画家 H.ドーミエ、P.ドレに影響を与えている。彼らの描く人物は、鼻や口そして身体どこかを誇張しており『パンチ』に登場するパンチ氏の姿もその伝統を受け継いでいる。1800年前後が最盛期であったイギリスの人形劇『パンチとジュディ』の舞台からとび出して、このユーモア雑誌の表紙に登場したパンチ氏は、せむし、かぎ鼻、しゃくれたあごが特徴である。しかし、1950年代中ごろになると当時の編集長は、ビクトリア朝以来使われてきたパンチ氏のカバーデザインを捨てて、色刷りの現代風な表紙に変り、今日に至っている。

本館には、1841年の創刊号から1942年12月23日発行の5314号までの203巻 (合本128冊) が所蔵されている。内容は、政治、ファッション、治安、評論、美術、音楽、演劇、スポーツなどに及び、〈ユーモア (優雅な皮肉) humour〉〈名言 wisdom〉〈尊敬 honour〉の三つの組み合わせによるイギリス人の生活記録である。イギリス独特の庶民の社会批判を反映した上品なユー

モアと風刺画が特色で、痛烈な皮肉を盛り込んだ批判もしばしば見られる。こうしてイギリス社会の全階層の人々の生活をあますところなく描写した、正に多くの〈小説よりも奇なる事実〉が示されている様は、多くの服飾風俗研究家が、今日でもその挿図を引用していることから知られる。このパンチ誌は明治初年に日本にも紹介され、漫画のことを〈ポンチ絵〉と呼ぶに至った事実は一般にも知られている。(内野)



パンチの鉛筆書 NO.IV 「外国の出来事」  
1841年